

現代文講座について

2008 年夏期講習

【現代文が勉強しにくいのはなぜ？】

現代文の学習は非常に大切です。特別に大切だといっても良いくらい大切です。今春の受験生を指導していても現代文の力＝国語力の大切さについて、あらためて痛感させられもしました。

どうしてもマーク模試での現代文の点数が安定しない、記述試験ができたりできなかったりする。問題文によって出来・不出来が大きく左右される。結局、実際に試験を受けてみないとできるかできないかわからない。

これは他の教科にくらべて非常に大きな特徴です。数学や英語なら 90％以上をとる生徒は、基本的に 90％以上とります。点数がだいたい読めます。けれど国語になると、中でも現代文になるとそうはいかなくなります。

これは非常に困ります。入試という「人生がかかった勝負」が、その時々 の 当たり外れみたいなものに支配されているからです。

なぜそうなるのか？

理由は単純明快です。
キチンとした学習がなされていないからです。「キチンとした」と「学習がなされていない」の両方です。

例えば 1，2 ヶ月、英語を、あるいは数学をまったく勉強しないという生徒はまずいないと思います。けれど主要教科であるにもかかわらず現代文になると、それこそこの半年、この 1 年、それどころかいままで一度も勉強したことがないという生徒も珍しくありません。そしてそのことについて「異常事態」だという意識もありません。しかしそれこそ本当に「異常事態」だというべきだと思います。

よくこういう疑問を耳にします。

- ① **現代文って学習できるんですか？ センスではないんですか？ →センスだからどうしようもないのではないですか？**
- ② **まゝ日本語だから大丈夫ではないですか？ →まゝ何とか読めるのではないですか？**

かなり一般的に浸透している意識ではないかなと思います。だから上

記のような「異常事態」が生まれるのですね。
簡単に回答しましょう。

確かにセンスです。けれど**トレーニングの上に成り立つ「センス」**です。それは行き当たりばったり、当たり外れがあるようなものとは根本的に違います。数学や物理のセンスが数学の学習の上にはじめて成り立っているのと同じです。「**論理**」に**貫かれたセンス**なのです。

確かに日本語です。けれど日本史だって世界史だって日本語で書いてありますが、だから大丈夫とは思わないですよね？ 数学や物理だって日本語＋数式です。でも「だからたいてい大丈夫」とは思わないですよね？

現代文は日本語です。けれども **現代文の読解は、日本語を 日常的に「聞ける・話せる」ということとは全く別次元のことがら**なのです。確かに「まゝ何とか」読めます。けれど大学受験で要求されているようには読めません。読めても書けません。

「まゝ読めるのでは？」という意見の背後に潜んでいるのは「読む」
ということについての認識の曖昧さです。逆に質問してみましょう。

「読む」と言うことはどういうことでしょうか？
大学受験で要求されている「読解力」とはどういう力でしょうか？
「読み解く」ということはどういうことでしょうか？ その手段・方法は？

こう質問するとたちどころに曖昧な返事になります。だから「まゝ読めるんじゃないかなあ？」という漠然とした言葉が出てくるのです。
その曖昧に、かつ漠然とイメージだけされている読解力を、身につけていくことができるでしょうか？ できないですよね？ この読解力だとか読むと言うことの中身が曖昧だから、それができるのかできないのかの判断も曖昧にならざるを得ないのです。そして勉強のしようがないのです。最初にのべた「**キチンとした学習がされていない**」と**言うことの根っこにあるものは、実は「国語力ってなんだろう」「読解力ってなんだろう」という点での曖昧さ**なのです。

この点が明確になれば、つまり身につけるべき力の正体が明らかになれば、そのための方法論も明確になります。当然のことですね？ 計算力の正体はだいたいはっきりしてますよね？ だから計算力をつけるためのトレーニング方法も想像がつかますよね？ それと同じことなのです。まず正体を掴むこと。そこからしかキチンとした学習は成り立たないのです。

【現代文の読解力について】

ここでは簡単に述べます。実際には講座の中で具体的に明らかにしていきます。

大学が要求していることは「**論理的に読み解く力**」です。くわえて「**正確に記述する力**」です。文学的センスや比喩表現などに対する繊細な感覚ではありません。また読者＝受験生の感想でもありません。

当然のことです。
大学は学問をする、研究をすることを軸にした教育機関だからです。例えば法律を学ぶために、微妙かつ精緻な比喩表現への繊細な感覚は必要ありません。あった方が良いかもしれないけれど、論理を論理として捉えきっていく力が何よりも求められます。理系の学部でも同じことです。論文を読むことができないのではどうしようもないのです。

受験生の論理的に読み解く力を知りたいから評論文が中心に出題されるのです。

評論文は、筆者が何かを一般的な読者に訴え、納得させようとして書いた文章です。だから必ず**主題＝テーマ**があり、**結論＝主張**があります。そして納得させるために**根拠**を示します。

ただしこのテーマと根拠と結論が、でたらめなつながりでは納得させることはできません。別言すれば「**論理的に説得しよう**」とするのです。そしてその論理には基本的に 3 つしかありません。

①原因と結果にかかわるもの。因果律。②同一性に関わるもの。抽象と具体など。③対比・対立に関わるもの。以上です。たったこれだけです。

試験問題はここを聞いてきます。ちゃんと筆者の結論を理解していますか？論理はたどれていますか？ということです。

ですから「筆者の主張に即して〇〇を説明せよ」といつてみたり、結論に対する根拠を述べさせる。同一性に関わるところでは「傍線部を具体的に説明せよ」であるとか「傍線部と同じことを述べている語句を 5 文字で抜き出せ」とか聞かれます。また原因と結果では「〇〇の理由を説明せよ」と聞かれます。

つまり、テーマ・根拠・結論（主張）と三つの論理のどれかに傍線部があり、その論理の対になっているもう一方を聞いてくるのです。論理の糸をたどれているのか、ということですね。そして論理の糸は、文章中にあるのです。基本的に必ずあるのです。であれば、それをたどる練習をすればいいのです。

加えて**語彙力**が要求されます。**背景的な知識**もある程度必要な場合があります。総合的な力を要求しますから、パズルのようなわけにはなか

なかいきません。けれどその論理をたどると言うことが核心なのです。

もう一つ大切なことは、主観を排除することです。客観的に読み切ると言うことです。別言すれば必ず本文中に根拠を求めていく と言うことです。設問が聞いているのは筆者の見解であり、書かれている内容と論理であり、受験生の意見や感想ではないからです。

＜読む＞ということは、まずは文章を客観的に、対象として捉え、その内的な論理を捉え筆者の主張をつかむことなのです。

【国語力はすべての教科の基礎】

ついでにもう一点。

経験的にいって、数学や理科、英語で苦勞している生徒は、かなり高い割合でこの国語力の不足に直面しています。率直に言って数学や物理、化学、生物、そして英語について書かれている解説や説明、解答などが正確に読まれていないのです。

数学でも問題文や解説の主語と述語をはっきりとさせて読むだけで質問が解決するようなケースがかなり多くあります。

例えば微分。教科書などでは、微分とはこういうものという説明が言葉やグラフなどを使って述べられていきます。そしてそれが平均変化率

の極限として立式され定義されます。その定義から $\frac{d}{dx}(x^n) = nx^{n-1}$ とい

う公式が導き出されます。多くの生徒がこの公式から出発し、問題にあてはめパズルのように解いていきます。

公式をどう使えるのかは練習の量にもよりますが、同時に公式といわれているものの理解の度合いにも大きく左右されます。ところで公式の理解とはどういうことなのか？使い方だろうか？

使い方は大切です。けれどそれだけではありません。

この公式には、微分とは何かということからはじまってその全体が凝縮されているわけですね。公式を理解するということは、この公式の裏側に微分の定義式（平均変化率の極限）、その図形的な意味などを論理としてもイメージとしても捉えているということです。奥行きと広がりをもってひとつの公式を捉えると言うことです。

現代文について書いていたのに、数学になってしまいました。筆者はもともと理学部（物理学科）だったので申し訳ない。

でももう分かりますよね？

この全体を捉える力は大半が実は＜国語的読解力＞なのです。

実際に、生徒自身に説明させてみて、キチンと言葉で説明できるかどうかと数学や物理の力はほぼ比例します。数式やグラフなども使いながら、言葉を読み取り、言葉で理解しているのです。

つまり国語力はあらゆる教科の基礎なのです。客観的に読むという意味でも大切です。学力が足りない生徒ほど、勝手に自分の主観を式やグラフ、文章に付与しています。自分で問題を混乱させ、解決不能に陥っていることが良くあります。これも実は国語力がかなり大きな影響を与えているのです。

ですから国語力が弱い状態で学習を進めていくことは非常に大きなロスを生み出します。特に理系の生徒の方は、できるだけ早い段階で基本的な読解の方法と力を身につけておくことがとても大切です。受験本番に突入するとそれこそ英語、数学、理科などで手一杯になりますから。

【夏期講習の講座の内容】

【現代文のトレーニング】（全6回 対象：全学年）

■テキスト 「入門編 現代文のトレーニング」
(堀木博禮 Z会出版 1000円)

※市販のテキストをそのまま使用します。各自で購入してください。

■現代文読解の入門。

まずは問題文をキチンと読むこと。その一歩として「問題文の中でどこが重要な箇所なのか」をつかむことからはじめます。どこが大切なところなのか掴めないと読会が始まりません。

■目的と概要

評論文を中心に問題演習を通して、文章を読むこと、問題文を読むこと、設問に対してどのように捉え、考えていけばいいのか、またどのように論理を追いかけていけばいいのかを考え、実際に練習していきます。

※解答や解説を精読してきてください。

問題集の設問以外にオリジナルの設問を用意します。

■注意事項

必ず予習すること。詳細な解答・解説がついているけれども、それを精読すること。

具体的には、

①問題文をしっかり読み込み、問題を解く。

②重要箇所のマークをする。

③マークした部分を巻末の模範例と比較し検討する。

④解答と解説を読み込み、自分の解答と比較検討する。

上記のことを必ず行ってから授業に臨んでください。上記のことを行ってきたことを前提に授業を行います。

問題文を読んでいない、問題は解いたけれども、解答や解説はしっかり読んでいない状態ではクラス授業を受ける意味が大きく減ります。

【現代文の論理】（全6回 対象：全学年）

■冬期・春期講習と同一の内容です

■オリジナルプリント使用（テキスト代不要）

■目的と概要

現代文の読会に不可欠な論理として「同一性」、「対比；・対立」、

「原因＝結果」、同一性の関連として「抽象と具体」「比喩表現」を整理します。

■要予習

通常の現代文の問題演習とあわせて少し異なる「作業」をしてもらいます。例えば＜同一性＞に関連する問題を扱う場合は、問題文中の同一の内容を示している部分についてピックアップし、関連づけていくというようなことを行います。問題演習だけではできないことです。いわば演習のプロセスそのものを取り扱います。

■現代文読解の基本的な論理を、

①同一性、②対比関係、③因果関係、④具体と抽象の関係、⑤比喩の関係を中心に5回に分けて演習します。これらの論理を十分に駆使できるようになるには演習が必要ですが、そのための一歩になる講座です。

【記述問題の整理】（全6回 対象：受験生中心）

■レベル 2次試験での記述問題を視野に入れて行います。

■プリント使用

■目的

しっかりした記述の解答を作り上げていくために、ポイントの整理の仕方、記述の仕方についての整理を行います。

■概要

記述するためには、必要な要素を網羅しなくてははいけませんが、その要素が設問部分の近くにある場合、遠く離れている場合、分散している場合に分けて演習します。

また記述の作成について、文章中の言葉をほぼそのまま使う場合と自分の言葉で書かなくてはならない場合に分け、実際の解答の作成を行います。